

HANDSプロジェクトが運営する「外国につながる子ども」の教育のための情報サイト



だいいじょうぶnet.

www.djib.utsunomiya-u.ac.jp

だいいじょうぶnet

検索

外国につながる子どもの教育

外国人児童生徒支援会議からのメッセージ

発行：宇都宮大学HANDSプロジェクト（代表：田巻松雄）

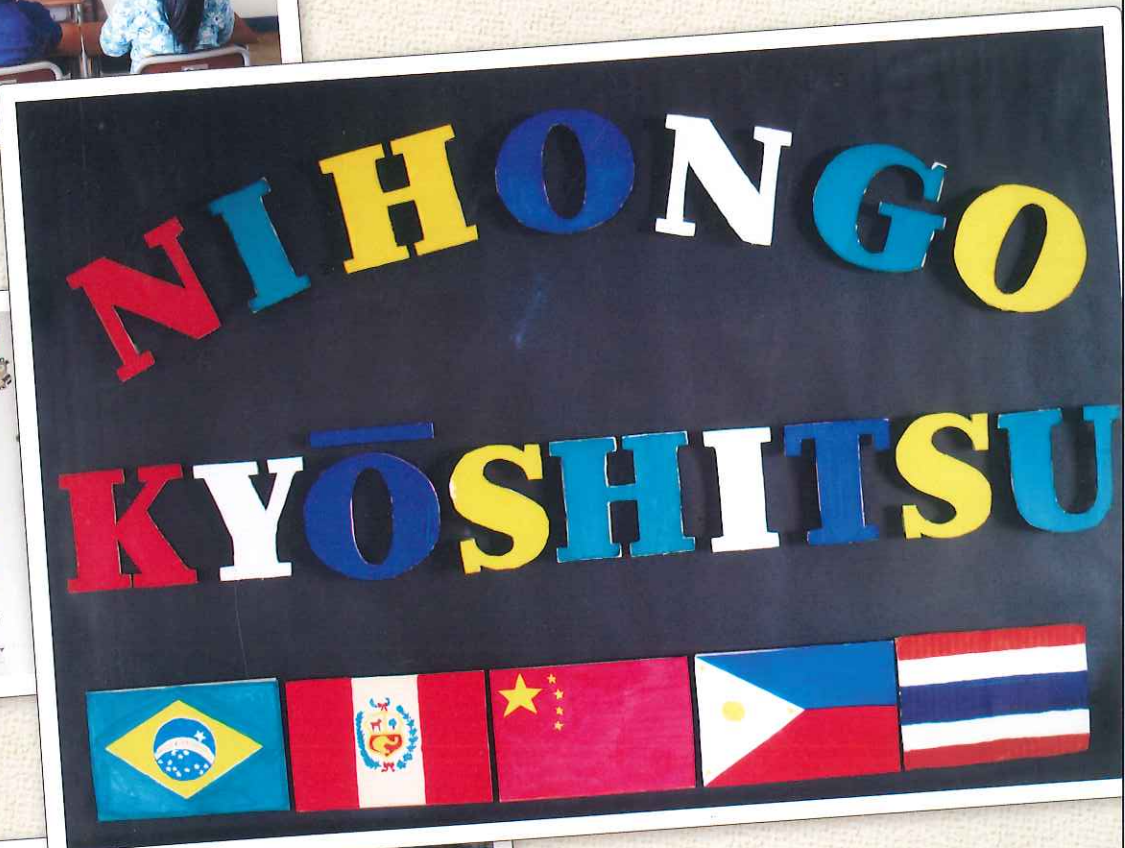
編集執筆：宇都宮大学国際学部特任准教授 若林秀樹

協力：栃木県教育委員会

発行日：平成26年3月31日

外国につながる 子どもの教育

● 外国人児童生徒支援会議からのメッセージ



宇都宮大学
HANDSプロジェクト

外国人児童生徒支援会議とは

宇都宮大学 HANDS プロジェクト外国人児童生徒支援会議担当
国際学部特任准教授 若林 秀樹

HANDS プロジェクト「外国人児童生徒支援会議」は、栃木県内「外国人児童生徒教育拠点校」(p4~5参照)の日本語教室担当教員をメンバーとする組織です。外国人児童生徒教育は歴史が浅く、日本語指導や教科学習支援についての情報が十分でないことに加え、学校内での体制作りについても決まった制度がありません。そのため担当教員からは、「何をして良いかわからない」、「精神的に孤立している気がする」など、切実な悩みがたくさん寄せられていました。また、この分野に長く関わるベテラン教員の貴重なスキルを、効果的に次世代に引き継ぐ必要性も生まれていました。平成22年7月「外国人児童生徒支援会議」は、これらの課題を解決する目的で発足し、年3回の定例会議のほか様々なアンケート調査を実施し、指導方法および教材情報の共有や、教員同士のネットワーク作りを続けてきました。

いっぽう県内には、「支援を必要とする外国人がいるのに日本語教室が無い学校=非拠点校」が毎年80校以上存在し、それらの学校で奮闘する教員への情報提供が急務となっています。そこで、「外国人児童生徒支援会議」での話しあいの成果を、教員のための手引き書という形で提供するため、『教員必携 外国につながる子どもの教育』シリーズ(p6~7参照)の作成にも取り組みました。

いま、外国人児童生徒教育は大きな転換期を迎えています。学校教育法施行規則の一部が改正され、外国人児童生徒等に対する日本語教育に関わる「特別の教育課程」が、平成26年4月1日に施行されます。これは、外国人が多数在籍する学校で取り組まれてきた日本語指導が、法的な裏付けのもと全ての学校に関わることを指しています。

日本語がわからない子どもがたとえ一人しか居なくても、その子の限らない未来のため学校ができることに、格差があってはいけないと考えています。また、学級において少数派を賢明に支援する教員の姿は、教科書で教えられない大切なメッセージを、他の児童生徒に伝えることができるでしょう。

HANDS プロジェクト「外国人児童生徒支援会議」が「教員同士がつながる力」によって培った新しいパワーを、新年度さらに多くの学校現場と共有できればと願っています。

2014年3月



Contents

P.02-03

外国人児童生徒支援会議とは

P.04-05

Q&A 栃木県の外国人児童生徒教育

P.06-07

『教員必携 外国につながる子どもの教育』

P.08-09

LIVE! 外国人児童生徒支援会議!

P.10-13

進め、日本語教室!

P.14-15

支えていただく人たちの「声」

UTSUNOMIYA UNIV. HANDS PROJECT

Q&A 栃木県の外国人児童生徒教育

Q1 外国人児童生徒はどれくらいの人数いるのですか？

栃木県教育委員会の調査によれば、平成25年5月1日現在、県内の小学校に873人、中学校に449人、計1322人の外国人児童生徒が在籍し、そのうち549人に日本語指導が必要とされています。「外国人児童生徒」という言葉は、外国籍を有することを学校が把握している児童

生徒を指していますが、実際には日本国籍であっても日本語が分からない子どもも在籍し、支援のニーズは拡大しています。HANDS プロジェクトでは、外国に何らかのルーツがあり言語等の支援を必要としている子どもを、「外国につながる子ども」と呼んでいます。

栃木県内の小中学校における外国人児童生徒在籍数 (H25.5.1、栃木県教育委員会)

小 学 校						中 学 校		
1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年	1 年	2 年	3 年
135	148	144	139	154	153	156	158	135
873(442)						449(107)		

※()内は日本語指導が必要な人数

(単位:人)

Q2 外国人児童生徒教育拠点校はどこにあるのですか？

栃木県教育委員会は、「外国人児童生徒の就学の受入の中心となり、外国人児童生徒に対する教育の研究や実践を行う学校を指定し、外国人児童生徒の教育の充実を図る」(外国人児童生徒教育拠点校指定運営要項より)という目的のもと、県内40校(H25年度、小学校30、中学校10)を拠点校に指定し、外国につながる子

どもの教育充実のため教員の加配措置を行っています。拠点校の指定期間は1年で実態に応じ更新されますが、近年は外国人が様々な地域に住むようになり、子どもの就学も分散しているため、拠点校数は少しずつ増加傾向にあります(H7=24校、H10=30校、H18=37校、H25=40校 右ページ参照)。

Q3 どんな教員がどんな指導をしていますか？

日本語教室を担当する教員の中には、内地留学生制度による語学研修経験者もありますが、日本語指導などの実務経験は無い場合がほとんどです。拠点校には地域や学校の特色に応じたニーズがあり、担当教員はそれらに応じた外国につながる子どもの支援を要求されますが、現状は、日本語指導の教科書も指定されていない、校内体制作りや保護者対応についても公式マニュアルがないなど、担当教員は試行錯誤を強

いられることも多いようです。これまでの指導は、日本語教室に通級させて行う「取りだし指導」がほとんどでしたが、近年は、教科学習を支援する「教科補充指導」や、担当教員が在籍学級の授業に出向き授業参加をその場で支援する「入り込み指導」を行うケースも増えています。また、拠点校によっては、学区外の児童生徒を受け入れたり、担当教員が他校に出向いて指導したりする場合もあります。

Q4 来年から何が大きく変わるのですか？

拠点校に限らず、これまでの取り出し指導による日本語指導は、正規の教育課程に位置づけられていませんでした。本来、在籍学級で受けるべき授業をどれくらい欠席したのか。また、欠席した代わりにどのような効果的指導がなされたかなどが、明確にされていなかったのです。学校教育法施行規則の一部改訂によって、平成26年度から実施可能になる「特別の教育課程」の要項には、個別に応じた取りだし指導計画に

ついての規定や、評価基準の明確化などが盛り込まれ、子どもが通常の授業に自力で参加できるまでの指導の質の向上が指示されています。文部科学省は地域の実情を考慮しながらの時間をかけた移行を促していますが、拠点校のように指導対象児童生徒も多くすでに担当教員の居る学校は、出来るだけ早い時期での「特別の教育課程」の実施が当面の課題となることでしょう。

Q5 教員にとって、いま一番必要なことは何ですか？

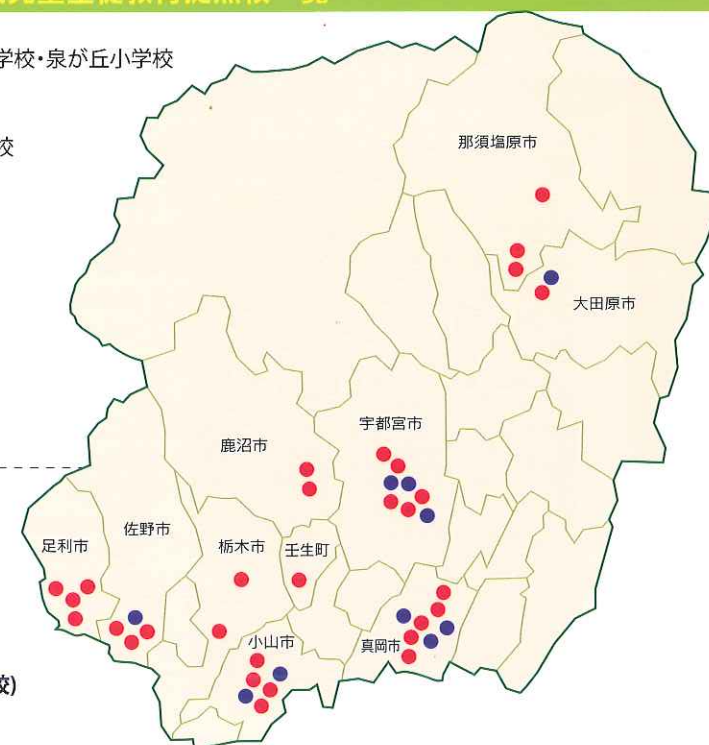
日本語の教え方がわからないなど、不安に感じることもたくさんあると思います。しかし、専門的なスキルを身につけるより前に、教員一人一人にできる大切なことがあります。それは、外国人児童生徒教育について、「意識を変える」ことです。これまでの外国人児童生徒教育は、一部の学校や教員に関わることで終わってしまいましたが、これからは「教員みんなで考えること」が必要となります。新たな「特別の教育課程」の目的は、単に外国人を支援することだけにあ

りません。外国人の存在やかれらの成長を通し、周囲の子どもが多くのことを学び、教育全体の質が向上することも目的としているのです。最初は日本語や生活習慣がわからなかった外国につながる子どもが、周囲の理解と支援によって将来に向かって進めるようになります。その実践を子どもと教員で共有することが、かけがえない教育につながるという意識が必要になるのです。

平成25年度 栃木県教育委員会 外国人児童生徒教育拠点校一覧

- 宇都宮市** 御幸小学校・清原中央小学校・清原東小学校・泉が丘小学校
御幸が原小学校
- 鹿沼市** 東小学校・みなみ小学校
- 真岡市** 真岡小学校・真岡東小学校・真岡西小学校
久下小学校・長田小学校
- 壬生町** 睦小学校
- 栃木市** 栃木中央小学校・大平中央小学校
- 小山市** 旭小学校・小山城東小学校
大谷東小学校・若木小学校
- 大田原市** 西原小学校
- 那須塩原市** 三島小学校・共英小学校・東小学校
- 佐野市** 天明小学校・犬伏東小学校・植野小学校
- 足利市** 毛野小学校・御厨小学校・南小学校
山辺小学校
- 宇都宮市** 清原中学校・泉が丘中学校・旭中学校
- 真岡市** 真岡中学校・真岡西中学校
真岡東中学校
- 小山市** 小山第三中学校・小山城南中学校
- 大田原市** 大田原中学校
- 佐野市** 城東中学校

●小学校計30校 ●中学校計10校 小中学校計(40校)



『教員必携 外国につながる子どもの教育』

2011-2013 BOOK 1~3

外国人児童生徒支援会議の発足当時、参加した担当教員の皆さんからは、「こんな話せる場所が欲しかった」、「悩んでいた気持ちが晴れてまた頑張れる気になった」など、多くの嬉しい声を聞くことが出来ました。やがてその声は、「ここで話し合った成果を、日本語教室が無い学校の教員に伝えなければならない」という方向に、変化していきました。そして、「忙しくて、しかも外国人児童生徒教育が未経験の学級担任でも活用することのできる、シンプルな手引き書を作ろう」というコンセプトのもと、『教員必携 外国につながる子どもの教育』の作成がスタートしました。

第1刊は『教員必携～、Q&A・翻訳資料』と題し、会議のメンバーが日頃感じている疑問点や初心者の頃苦労した Question を持ち寄り、それらに対する Answer や Checkpoint を紹介することにしました。また、ポルトガル語とスペイン語による、家庭向け通知の翻訳文書も収録することができました。第2刊は『教員必携～外国人児童生徒教育の原点とは何か』と題し、教員として外国につながる子どもに接する際の心構えや、専門的なスキルが無くても十分な支援ができることを伝えました。そして第3刊は、『教員必携～みんなで考える時がやってきた!』と題し、学校教育法施行規則の一部改正により平成 26 年度から施行される、日本語指導に関する「特別の教育課程」を踏まえ、これからの外国につながる子どもの教育は全ての教員にとっての課題となることや、周囲の児童生徒に与える影響などについて記しました。

BOOK SERIES 2012

教員必携 続 外国につながる子どもたちの教育



本書を手にとった教員の皆さんは、外国につながる子供の教育について少なからず不安を持っていることと思います。しかし子どもたちは、皆さんが感じているより遙かに大きな不安を抱えていることを忘れないでください。

(中略)

日本語や生活習慣の習得など、これから多くの壁を乗り越えなければならない子どもの心にとって大切なのは、「自分はここに居ていいのだ」という安心感です。彼らは言語面でも生活面でも周囲の子どもたちとは全く違う地点に立っています。すなわち諸活動において、未だ「スタートラインに立てていない」子どもたちだと認識してください。周囲の人たちはその「違い」に気づくと同時に、「違い」を認めていることを伝えてあげることが必要です。

外国につながる子どもが日本語を理解せず、学校生活に支障があると、「日本語をどのように教えればよいか」という点に頭が行ってしまいます。しかしあなたが学級担任だったら、「スタートラインに立っていない」という「違い」を、他の児童生徒にもはっきりと認識させることが最初の仕事です。日本語がよく分からないから、行動や学習が遅れてしまうこと。生活習慣が違う部分があるから、お互いに戸惑う場面があること。そして自分は学級担任としてこの違いを認め、できる限りの支援をするつもりだから、みんなも同じ気持ちになって欲しいことを伝えてください。

※本文 第1節【安心】p10より引用

BOOK SERIES 2011

教員必携 外国につながる子どもたちの教育



Question 「日本語が分からないのに、授業には参加させたほうがよいのでしょうか」

Answer 日本語が分からないなら、まずは日本語を習得するべきだという考えに間違いはありません。しかしそれは、日本語習得のために授業を抜けても構わないという意味ではありません。授業を抜けて別室で日本語の指導を受けるのは、日課の中で他に時間がとれないという理由からです。

理想は他の児童生徒と同じように全ての授業を受けながら、個別的な日本語指導を行うことですが、現実的にはバランスを考えながら別室で日本語指導を受けることになるでしょう。計画する上で大切なことは、「この授業は無理だから別室で日本語を」と安易に判断するのではなく、その子どもの将来を考えた時に今どんな支援が最も効果的かを見極めることです。授業は欠席した分だけ追いつくのが困難になってしまいます。(以下略)

Checkpoint!

- 全ての学習活動を他の児童生徒と同様に出来ることが目標です。
- 日本語指導で抜けた分の授業は、後で取り返すのが非常に困難です。
- 子どもの将来を第一に考えれば、学力を付けることが教師の目標です。

※本文 p20より引用

BOOK SERIES 2013

教員必携 外国につながる子どもたちの教育 3



少しだけ想像してください。例えば、小学校の30人学級に、1人の日本語が話せない外国人児童が編入したとします。学級担任を始めとする教員たちは試行錯誤を繰り返し、その子にいろいろな支援を講じたとします。そんな教員たちの様子は、周囲の児童に対して、「たと言語が通じなくても、分かり合おうとする努力が必要なんだ」という無言のメッセージを発信します。やがて、児童が中学校に進学し、学習面でも成果を上げ高等学校に進学したとします。それは周囲の生徒に対して、「始めは異なる存在だと感じて、情報を共有して理解し合えば、同じ目標をもって進むことができるのだ」という無言のメッセージになるのです。すなわち、学校で生活を共にした子ども全員が、「言葉も習慣も違う者同士でも分かり合うことができる」「少数派や弱いと思えた立場の人でも希望を持って進むことができる」、という教育実践の証人となるのです。大人たちは、外国につながる子どもの存在と成長を通して、周囲の子どもにかけがえのない価値に気づかせたことになるのです。

(中略)

学校の教員が、数の上では少数であるが多様な価値観を持つ外国につながる子どもと向き合い、将来に向けて支援することは、日本人を含むすべての子どもの心を育てることにつながり、未来の社会を形成するための大切な教育実践と言うことができるのです。

※本文 第8章「終わりのメッセージ」p52より引用



1:45pm もうすぐ始まります



2:00pm スタート



LIVE!

第3回外国人児童生徒支援会議

支援会議の様子

プログラム

1. 会議の内容と進め方について
2. HANDS プロジェクト刊行物について
3. 「特別な教育課程」の実施に関する共通理解
4. とことん語ろう、栃木の外国人児童生徒教育！
5. 事務連絡など

2014.2.7 PM2:00-4:30



3:30pm とことん語ろう！



2:05pm HANDSプロジェクト代表のあいさつ



中学校から...



小学校から...



進学のこと...



学び、共感し、高め合える「場」

2014年2月7日(金)、今年度3回目の外国人児童生徒支援会議が開催されました。4月から実施される「特別な教育課程」に関する共通理解が図られたほか、「とことん語ろう、栃木の外国人児童生徒教育！」と題した討論会が行われました。「学級担任との連携を充実させたい」、「子どもにもっと学習意欲を持たせたい」、「校内の指導体制について学校全体で話したい」などの意気込みや、「学校現場だけでは最近の多言語化に対応しきれない」、「小学校だけでなく卒業後の中学校にも拠点校が必要」などの課題も発表されました。また、「拠点校同士で指導内容の共通化を図る必要がある」、「小教研や中教研に日本語指導部会を作りたい」など、外国につながる子どもの教育の充実と発展に向けた、活発な意見交換が行われました。



2:20pm HANDSプロジェクト刊行物(本冊子)についての報告



多くの教員に伝えたい



3:20pm 休憩



もっと話したい...



PM3:00pm 「特別な教育課程」の共通理解

HANDS プロジェクトが刊行するニュースレター『HANDS next』に連載中の「進め、日本語教室！」には、日本語教室で活躍する担当教員の奮闘ぶりや日頃の思いが綴られ、一般の教員の皆さんが知らない新鮮な感動であふれています！

HANDSnext第12号(2013年2月20日発行)より

出会い、ふれあい、にほんご教室



習字が大好き、
みるみる上達！

宇都宮市立清原中央小学校
教諭

田崎 啓三

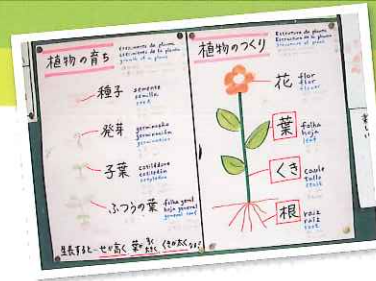
滞日期間の長い児童がほとんどになっていた我が校に全く日本語のわからない児童がやってきました。パキスタンから来た女の子(5年生:Sさん)です。初期指導の児童は本校にとって久々で、私はうれしいと同時に、不安も覚えました。しかし、そんな不安も何のその。Sさんは、初日からエンジン全開。来日後登校を楽しみにしていたSさんは、基本的なあいさつや身の回りの言葉を覚えたり、ひらがなの練習に真剣に取り組んだり、私にもたくさんのウルドゥー語を教えてくれたりしました。ウルドゥー語の先生が見つかるまでの2週間は、実物や絵や図、そして、翻訳サイトから得たウルドゥー語が頼りでした。それでも、算数や理科の勉強は進みました。そんな時期に行った算数の「合同」の学習も、「合同」「合同じゃない」「対応」など、すぐに理解してしまいました。こんな彼女ですから、ウルドゥー語の先生が来校されるようになると、さらに学習は進みました。その先生は、必要な日本語を丁寧に指導しながら、学習内容を彼女に分かりやすく説明してくれます。教室の勉強が少しでも分かれば、先生や友達の話聞く態度が違います。教室でもにほんご教室でも真剣に取り組むSさんは、半年余りたった今、たくさんの言葉を覚え、たくさんのことを話すようになっています。

さて、本教室の子どもたちが特に好きなのが「習字」です。書写の時間は全員がにほんご教室通級の時間になっており、週1回のこの時間をみんなとても楽しみにしています。そもそも書写の時間を通級の時間にしたのは、最低限の課題を短時

間で仕上げて、他の学習(言葉や漢字、算数など)に充てようという安易な(?)考えだったのですが、いざ指導してみると、みんなみるみる上達し、字(特に毛筆)を書くのが大好きになってしまったのです。教室のみんなに肩を並べるほどの字が書けるようになると、それは自信になります。肩を並べるところか、校内書初め展での入賞者が何名も出たほどです。冬休みには大きな書初めをやりたい子が何人も来て、にほんご教室はにぎわいました。Sさんもすっかり習字が好きになり、初めての書初めに取り組みました。

休み時間に多くの日本人児童が訪れるのも見慣れた光景です。その目当ては、たくさん置いてあるクイズ・パズルのプリントやここ数年飼っているカブトムシ(もちろん今は幼虫)ですが、これにもほんごの子たちのクラスでの宣伝が始まりでした。クラスでは控えめな子が、得意そうにカブトムシの説明をする姿は実にほほえましいです。

にほんご教室の児童は、「できない」子なんかじゃありません。むしろわずか10歳前後で2か国語を理解するすごい子たちです。そして、われわれに世界の風を吹き込んでくれるありがたい存在です。私は、こんな子たちが将来世界を股にかけて活躍する姿を夢見て、毎日やりがいを持って指導しています。そして、彼らに「日本に来てよかった！」「この学校に入ってよかった！」と言ってもらえるように、各担任の先生方、にほんご教室のスタッフの先生方と一緒に、これからも頑張りたいと思います。



HANDSnext第16号(2014年2月14日発行)より

パキスタン人姉妹から教えられたこと



幸せな出会い、
感動の涙…

壬生町立睦小学校
教諭

栃木 康子

壬生町に異動した私に与えられた仕事は、「日本語教室」の担当でした。全てが初めてのことであり、わからないことだらけでした。何をしたらいいのだろう、どんなふうに指導したらいいのだろう、と悩みは尽きず、不安でいっぱい毎日でした。

でも、本当に不安だったのは子どもたちの方だったと思います。睦小には、パキスタン人の姉妹がいました。6年生の姉と1年生の妹です。姉はあまりしゃべらず、日本語教室に来てから仏頂面をしていて、心を開いてくれる感じではありませんでした。今思えば、隣町にただでオロオロしているような私に、親の都合で全然知らない国に連れて来られた彼女が、信頼を寄せてくれるわけなかったのでしょうか。しかし、自分のことで精一杯だったその頃の私は、そんなことを知るよしもなく、何度も心が折れかけました。

一方、妹は天真爛漫でのびのびしていました。ひらがなも足し算も覚えるまでちょっと大変でしたが、とてもきれいな文字を書きました。1年生の教室にもどると、クラスメートが口々に彼女の文字を褒めてくれ、はにかみながらも嬉しそうにしていた姿が印象的でした。でもやっぱり初めての学校生活、細かいところは姉に頼ることもたくさんありました。毎日の宿題のこと、学校に持ってくる物の用意のこと、遠足の持ち物のこと、提出する書類のこと…姉を通して説明すると、いつもちゃんとやってきてくれました。6年生の姉は無愛想でしたが、彼女なりに

私に精一杯協力してくれていたのです。

彼女たちは、母語のウルドゥー語が「少し読めるけれど、ほとんど書けない」という状態だったようです。私は、「無理をして日本語を覚えるよりも、母語を大切にされた方がよいのかなとも思い、姉とふたりでアラビア文字を練習したこともありました。私が教えるべきものではないだ

ろうし、もとより教えることなどできません。けれど、私も彼女たちの国の言葉に興味を持ち、勉強してみることで、日本語を勉強している彼女たちの気持ち

に少しでも近づけたら、という思いもありました。アラビア文字は模様のように美しいですが、何がどうなっているのか私にはチンプンカンプンでした。この子たちもきつとこんなふうに苦勞しながら日本語を勉強しているのだろうな、と思うと、姉の表情もなんとなくおだやかに見えてくるような…。

しかし、姉の卒業を目の前にしたある日、二人の急な帰国が決まりました。やっといい関係ができ始めたと思ったところだったのに。私は、「元気でね」と伝えるのがやっとでした。最終日前日の放課後、姉から電話がありました。「先生、宿題たくさんください。パキスタンに帰っても日本語を忘れたくないから。」日本を嫌いにならないでいてくれてよかった、思わず涙がこぼれてしまいました。二人に出会えたことは、私にとって本当に幸せなことでした。日本語を教えることも私の仕事ではあるけれど、もっと大切なのは、外国から来た子どもを理解し、一緒に寄り添うことではないかと教えられた気がします。



HANDS プロジェクトが刊行するニュースレター『HANDS next』に連載中の「進め、日本語教室！」には、日本語教室で活躍する担当教員の奮闘ぶりや日頃の思いが綴られ、一般の教員の皆さんが知らない新鮮な感動であふれています！

HANDSnext第11号(2012年11月21日発行)より

今日も元気いっぱい活動中です！



生徒の笑顔で
私も元気に！

佐野市立城東中学校
教諭
塚田 尚美

佐野市立城東中学校の今年度の在籍生徒数は369名です。そして日本語教室に通級する生徒は12名で、その内6名が日本語の初期指導を必要としています。

スペイン語の内地留学研修を通して県内の日本語教室を参観した時から、「私も日本語教室で教えてみたい！」と思うようになり、晴れて昨年度から本校の日本語教室を担当することになりました。当初は日本語の初期指導を必要とする生徒がいなかったため、教科補充指導が中心の順調(?)なスタートを切りました。しかし、次第に約3ヶ月に1名のペースで初期指導を必要とする生徒が編入してきました。やがて穏やかな日々が一転し、今では大盛況、大忙しの毎日を送っています。

本校の日本語教室は、私の他に英語科の教員免許を持つ先生が1名、中国語、ポルトガル語・スペイン語が堪能な2人の先生、そして英語を話すボランティアの先生の5名体制で指導に当たっています。加えて、前任の日本語教室担当の先生の幅広いサポートも得ることが出来るので、大変恵まれていると感謝しています。

日本語教室を担当して約一年半が経ちましたが、外国人生徒の日本語や学習への理解は様々で、毎日の指導はいまだに暗中模索といったところです。加えて今年は、私自身が英語の授業を週に9時間担当しているため、日本語教室に関わる時間は限られてしまいます。私が日本語教室の授業準備が間に合わない時は、支援の先生方が教材を用意して、どんどん授業を進めてくださるので助

かっています。そんな授業の合間にも、生徒と雑談をしたり悩みを相談されたりと、貴重な時間を最大限に活用してコミュニケーションを図っています。私との話を終えて笑顔で教室へ戻っていく生徒の姿を見ると、私も疲れを忘れて元気になります。

小学校と中学校の大きな違いは、高校受験という大きな試練が待っていることです。まだ日本語の初期指導を必要とする生徒であっても、受験に臨まなければなりません。日本語指導、教科指導そして受験準備などやるべきことは盛りだくさんです。この2学期からは、高校受験対策としての作文指導や面接対策も始めました。

日本語教室での指導はまだまだ覚えることがたくさんあって大変ですが、毎日がとても充実しています。一緒に指導に当たる先生方は、全員が女性で性格もよく似ているため(私が勝手にそう思っているだけ)、チームワークはバッチリです。また生徒の出身国も様々です。中国、フィリピンそしてボリビアなど、色々な生徒が入れ替わり通級してくるので、一日で世界一周ができそうです。それぞれ異なった母語を話す生徒同士が、覚えてたの日本語で話している姿を見ると、とても微笑ましくなります。

慣れない日本で頑張っている生徒達を見ると、この日本語教室がかれらにとってよい“居場所”となってくれることを願います。生徒も私も多くの人に助けってもらいながら、今日も日本語教室は元気いっぱい活動(営業)中です。



HANDSnext第15号(2013年11月11日発行)より

『かけはし』=『架け橋』を目指して



本当の意味での
『架け橋』を！

小山市立小山城東小学校 教諭
小山市外国人児童生徒適応指導教室
『かけはし』担当
山本 一弘

4月1日、小山市立小山城東小学校に赴任したばかりの私に、『かけはし』の担当者として最初の仕事がありました。それは、『かけはし』への入級の面接でした。対象者はパキスタン人の中学生男子生徒。何も分からない状態でしたが、『かけはし』に勤務しているバイリンガル指導員の協力を得て、何とかその場を乗り切ることができました。そして、赴任初日にして、外国人児童生徒が増加傾向にある小山市の現状を実感することができました。



また、このとき面接した生徒がパキスタン人ということにも驚きました。私は、『かけはし』の担当になる前も別の小学校、中学校で『日本語教室』を担当していた経験がありますが、そのときの外国人児童生徒と言えば、

ほとんどがブラジル人とペルー人でした。しかし、現在の小山市では、外国人児童生徒の「散在化」、「多国籍化」の傾向が見られ、特に、フィリピンやパキスタンといったアジア諸国からの児童生徒が増加しています。

さて、私が『かけはし』の担当になり半年が過ぎましたが、その間、20名以上の児童生徒の指導に当たってきました。その中で感じたことは、文化も習慣も違う、言葉もよく分からない日本で、

彼らは本当によくがんばっているということです。彼らは国籍も様々なため、『かけはし』での公用語は、学習中のまだつたない日本語ということになります。日本語で何とか自分の気持ちを伝えようとしている姿を見ると、私自身もがんばろうという気持ちになります。また、私は外国語が話せないため、彼らが母語で話しているときには、何を話しているのかよく分かりません。つまり、会話力という点では一番能力が低いのは私なのです。でもそのお陰で、「彼らも日本の学校では、いつもこのような気持ちなんだろうなあ」と感じる事ができ、その都度、彼らのためにできるだけことをしてあげたいという気持ちをもつことができています。

しかし、彼らのために私がしてあげられることはほんのわずかしかなかった。そのため、これまでも『かけはし』の指導員、小山城東小学校、通級児童生徒の在籍校、小山市教育委員会など、多くの方々に支えられてきました。外国人児童生徒が日本の学校生活、さらには日本の社会に適応していくためには、『かけはし』の指導だけでは不十分です。そこで必要になってくるのが関係各所との連携だと考えていますので、これからもその充実が図れるように努めていきたいと思っています。

近年の日本の状況を考えると、今後も外国人児童生徒は増えていくと思います。そして、そのような現状の中で、『かけはし』の果たす役割は非常に大きなものであるとも感じています。『かけはし』が外国人児童生徒にとって、本当の意味で『架け橋』となれるよう、今後も様々な方々の協力を得ながら努力していきたいと思っています。



FROM OUTSIDE & INSIDE 「声」

外国人児童生徒支援会議は、教育委員会や学校現場の方々、そして HANDS プロジェクトを応援していたたくさんの方々によって支えられています。『これからの外国人児童生徒教育』刊行に寄せて、5人の皆さんからメッセージをいただきました。



これからの外国人児童生徒教育を考える

佐野市教育委員会 教育長 岩上 日出男

近年、日本国内に在住する外国人が以前より増えていきます。それと同時に、家族とともに来日する児童生徒も増加し、学校現場における外国人児童生徒への教育の充実が求められています。

幼少期に来日した外国人児童生徒の中には、日本語の習得も十分でないばかりか、母語も保持できていない児童生徒もいるところです。

平成 26 年 4 月から、日本語指導が必要な外国人児童生徒を対象に、「特別な教育課程」が組めるよう法改正がされましたが、まだまだ多くの課題が残されているのが現状です。

一人一人の児童生徒が、将来の夢に向かって進むためには、様々な立場の皆さんの理解と、惜しみない支援が必要となります。関係機関が連携をとり、外国人児童生徒教育に取り組むことが、国際理解交流推進の一助になると考えています。

支援に関わる全ての教員のために

真岡市立真岡西小学校 校長 小高 邦夫

10 数年前の外国人児童生徒といえば、ブラジルやペルーなど南米からがほとんどでしたが、近年はタイやフィリピン、そして中国といったアジア諸国からの子どもが多く在籍し、学校も多岐の言語に対応することが求められています。それらの課題に直面した担当教員にとって、外国人児童生徒支援会議は研修や情報交換の場として、また、外国人児童生徒教育の在り方や具体的取り組みについて話し合う場として、有効な会議と言えるでしょう。

特に、それぞれの学校の現状や課題の共有にとどまらず、初期指導や進路指導についての研修や、教員用手引きの作成などにも着手し、拠点校以外の外国人児童生徒在籍小中学校に情報提供ができたことは、栃木県における外国人児童生徒教育のレベルアップにつながっています。

学校教育法施行規則の一部改正により、平成 26 年 4 月から「特別な教育課程」による編成・実施が可能になったことから、外国人児童生徒教育の分野が大きく変わろうとしています。新しい制度への不安も募る中、拠点校の役割や地域の学校との連携の必要性もより高まり、外国人児童生徒支援会議の役割はより大きなものになると考えられます。

本会議が拠点校担当教員のためだけでなく、今後、すべての小中学校や、その他の教育現場で指導に当たっている指導者の研修の場として、機能していくと良いと考えています。



「共に生きる」ために

那須塩原市教育委員会 指導主事 山本 幸子

私が日本語教室を立ち上げた時、教材は息子達が使い古したカルタや絵本でした。言葉も教え方もわからないまま、ただ夢中で目の前の子供達と向き合い、辞書を引き引き日々の出来事を新聞に綴りました。それでも、諸事情により夢を諦めて社会へ巣立つ彼らを見送る時は、自分の無力感に随分苛まれました。

「外国人児童生徒支援会議」は、日本語学級の教員、児童生徒、保護者の「命綱」です。なぜなら、教員の指導力の向上は、そこに集う子供達の未来に光を与えることだからです。国籍や言葉に関係なく、全ての子供達が夢を語り、手を携えて歩き続けることができるようになった時にこそ、初めて、「共に生きる」ことが可能になるのだと思います。



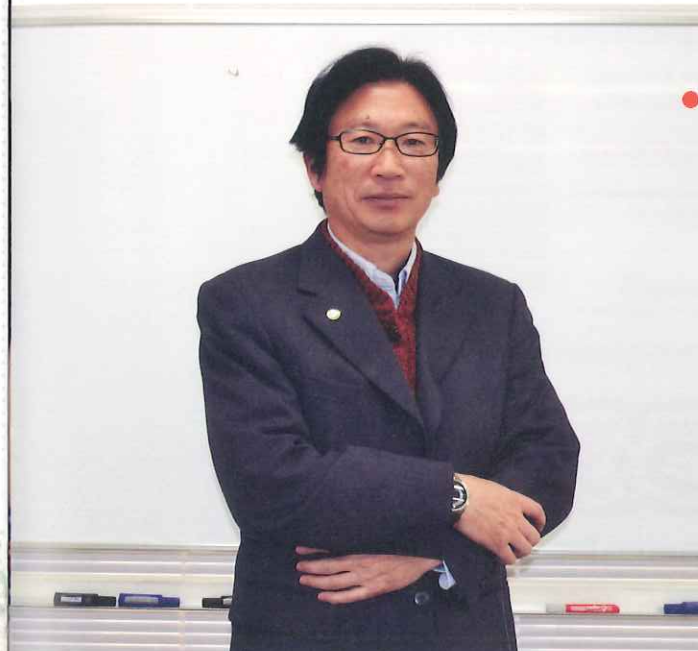
一人で悩まず、共に高め合う

真岡市立真岡東小学校 教諭 佐藤 和之

15 年前、初めて日本語教室担当になったとき、私は何をどう教えていいのか迷いました。各学年の教員たちから離れて何もかも自分一人でやらなければならない立場に戸惑いました。

平成 22 年に発足した HANDS プロジェクト外国人児童生徒支援会議では、同じ立場の先生方と現状や課題について話し合う中で、参加者は幾つもの解決の糸口を見つけることができたと思います。特に編入学直後の子どもへの初期指導のあり方や学級担任との連携の仕方などは、担当者だれもが感じる課題ですが、多くの実践例を知ることができました。私自身、平成 24 年度の『教材の活用に関する研修』では、様々なテキストや教材とその活用方法を知ることにより、教室での指導の幅が広がりました。

そして、教員向けの手引き書である『教員必携』シリーズの作成に関わり、これまでのノウハウを集成する作業を通して少数在籍校への情報提供が実現したことは、有意義な経験となりました。



一人一人の思いを手渡して

佐野市外国人児童生徒支援員 原田 真理子

拠点校担当教員にとって、教室運営や日本語指導のノウハウが得られる機会はそんなに多くありません。HANDS プロジェクトの外国人児童生徒支援会議には、これまで日本語教室を担当した教員一人一人の思いを大切に扱い、それを形に残すことで、HANDS の名の通り、外国につながる子どもたちへの支援のバトンを未だ見ぬ人に渡す役目があると思います。担当教員が日々子どもたちと真っすぐに向き合っているからこそ生じる悩みや葛藤、またはその子どもたちが成長していく姿を見る喜びを共有し、さらに質の高い指導方法を見出すための場であってほしいと願っています。この支援会議が拠点校担当者のみならず、あらゆる立場で日本語指導を必要とする子どもたちと向き合っている方々の手と手を取り合った場に発展することが私の夢です。

